

非形式論理学の初期の発展と クリティカル・シンキングの起源

吉田 寛

本稿では、現在北米やその他の英語圏の大学において基礎科目のひとつとなっているクリティカル・シンキングの起源としての非形式論理学の発生と初期の発展に焦点を当て、1950年ごろから1980年ごろまでの非形式論理学に関する主要な研究論文や影響力のあった教科書の変遷をレポートする。

クリティカル・シンキングと非形式論理学

非形式論理学とは、フレーゲの『概念記法』以来の形式論理学に対置される論理学の一分岐である。すなわち、形式論理学は議論を演繹的か帰納的かの規準で評価し、悪い議論とは非妥当であるか非健全なものであるとするのに対して、非形式論理学は必ずしもその規準だけでは評価しきれない日常生活におけるさまざまな議論を扱い、そのような議論の評価に必要とされる論理的基準と原理を定式化しようとする研究である。日常生活や学問において有効で実践的な思考の技術や態度を追求するクリティカル・シンキングは、このように日常のさまざまな議論に焦点を当てる非形式論理学を起源のひとつとし、またその理論的成果を取り込みつつ発展してきたのである。そして現在、非形式論理学は、クリティカル・シンキングに対して、日常生活における議論の解釈や評価にとって必要あるいは有効な一般的な思考の規則や原則を供給する、理論的な研究領域として位置づけられている¹。

非形式論理学の発展

1950年代後半から1980年ごろまでの間の非形式論理学の発展はめざましい。これについて R. H. Johnson と J.A. Blair が詳しいサーベイを残している²。このサーベイは1978年に開催された、第一回非形式論理学(informal logic)シンポジウムにおいて発表されたものであり、非形式論理学の初期の発展を知る上で貴重な手がかりとなっている。以下、主にこれ

¹ Alec Fisher and Michael Scriven, *Critical Thinking ~its definition and assessment ~*, 1997, Edgepress, p69

² R. H. Johnson and J.A. Blair, "The Recent Development of Informal Logic", in *Informal Logic ~ the first international symposium ~*, 1980, R. H. Johnson and J. A. Blair (ed.), Edgepress, PP3-28

によりつつ、特にクリティカル・シンキングの起源という関心から、非形式論理学の初期の発展を、(A)研究書、(B)雑誌記事論文、(C)教科書、の3つのカテゴリー別にレポートする。

(A)研究書

Johnson らは1953年からの25年間における重要な著作としては以下の3つしかないとする。

1:Toulmin の *The Use of Argument* (1958)³

2:Perelman と Olbrechts-Tyteca の *La nouvelle Rhétorique* (1958)⁴

3:Hamblin の *Fallacies* (1970)⁵

1は現代の形式論理学が実際の実践的な議論の評価から離れてきたことを指摘し、論理学に歴史的、認識論的考察をふたたび導入しようとするが、2と同様に現代の論理学にはほとんど影響を与えなかった。3はこのなかではもっとも認知されたものである。これは、誤謬アプローチ——誤謬の研究によって非形式論理の理論的本性を探るアプローチ——や非形式論理が、論理学の教科書において無視されていることを広く認知させた。1で Toulmin が提示している立場は、記号論理学の理想化された論理に対して日常生活における実際の論理を取り上げるという点で、クリティカル・シンキングの精神と重なるものであろう。

(B)雑誌記事論文

Johnson らのサーベイは、非形式論理に関する雑誌記事論文の量、分布、主要な研究、主要な領域について報告しているが、特に注目すべきは主要な領域である。非形式論理についての雑誌記事論文の主要な領域は、(i)誤謬の理論と(ii)議論に関する理論、(iii)その他の理論の3つに区分される。

(i)誤謬の理論は個々の誤謬が生じる条件の明確で厳密な定式化を目指すものとされる。Woods と Walton の業績がこの分野で著しい⁶。この領域では、論点先取 (begging the question)、次いで人に訴える虚偽(ad hominem)がよく考察されたが、その他の誤謬も扱わ

³ S. Toulmin, *The Use of Argument*, Cambridge U.P., 1958

⁴ Ch. Perelman and L. Olbrechts-Tyteca, *The New Rhetoric: A Treatise on Argumentation*, Notre Dame U.P., 1969 (English translation trans. by J. Wilkinson and P. Weaver)

⁵ C. L. Hamblin, *Fallacies*, Methuen and Co. Ltd., 1970

⁶ Ex. J. Woods and D. Walton, "Argumentum Ad Verecundiam", in *Philosophy and Rhetoric* 7, Summer, 1974. or J. Woods and D. Walton "Ad Hominem", *Philosophical Forum* 8, 1977

れてきた。他方(ii)議論に関する理論は、形式論理学の扱えない日常的な議論の本性の明確な概念的定式化を目指してきた。ここでは、例えば Isminger による「妥当」以上であるが「健全」ではないような「成功した議論」の概念の提唱⁷、や Brockreide による性的モデル——例えば、強姦者、誘惑者、恋人——での議論の実践の説明⁸、などが注目される。その他、(iii)分類し難いテーマとして、文脈(context)に関する Anderson と Mortenson の仕事⁹、隠れた前提の発見について独特の推論だとする¹⁰Lee の仕事、実践的推論の場における形式論理学の制限を説く Scrivan の仕事¹¹などが紹介されている。

誤謬の研究については非形式論理の中心的研究課題の一つとして当時多くの仕事が出来、非形式論理の最重要研究課題であるかのような様相を呈した。だが、非形式論理学やクリティカル・シンキングが、関心をより具体的での実践的な技術のポジティブな提示に移すにつれて、誤謬アプローチは相対的に地位を低下させてきたように思われる。一方、議論に関する理論は、議論の評価や解釈がクリティカル・シンキングを構成するポジティブな要素として重視されるに伴って、より詳しく解説、展開されるようになってきたようである（例えば、文献紹介の Hughes の議論を参照）。

(C)教科書

第二次大戦後の入門的な論理学の教科書は、二つの世代に分けられる。第一世代は、たとえば Copi の *Introduction to Logic*(1953)¹²に代表されるものである。この世代の教科書に多く見られるのは、演繹的推論と帰納的推論にのみ焦点を当て、誤謬や日常生活への論理の適用には十分な注意を払わない、いわゆる「グローバル・アプローチ」である。しかし少数ではあるが、「クリティカル・シンキング・アプローチ」と呼ばれる、論理を日常生活における明晰な思考のための道具としてとらえ、形式的体系よりも自然言語に注目し、例や練習による技術の実践を重視するアプローチも存在した。この代表は Beardsley の *Practical Logic*(1950)¹³であり、これは第二世代の教科書の原型となったとされる。

⁷ G. Isminger, "Successful Argument and Rational Belief", in *Philosophy and Rhetoric* 7, 1974

⁸ W. Brockreide, "Arguers as Lovers" in *Philosophy and Rhetoric* 5, 1972

⁹ R. L. Anderson and C. D. Mortensen, "Logic and Marketplace Argumentation" in *Quarterly Journal of Speech* 53, 1967

¹⁰ D. S. Lee, "Assumption Seeking as Hypothetic Inference" in *Philosophy and Rhetoric* 6, 1973

¹¹ M. Scriven, "Philosophy of Education: Learning Theory and Teaching Machines", in *The Journal of Philosophy* 62, 1970.

¹² I. M. Copi, *Introduction to Logic*, The Macmillan Company, 1953

¹³ M. C. Beardsley, *Practical Logic*, Prentice-Hall, 1950

Michalos の *Improving Your Reasoning*(1970)¹⁴や文献紹介にもある Capaldi の *The Art of Deception*(1971)などに始まるとされる第二世代では、グローバル・アプローチに属するものは減少し、逆に非形式論理を主として扱うものが増えたことが報告される。Johnson によればこの世代の教科書には、演繹的-帰納的という二分法を部分的に放棄し、誤謬や日常的な議論を扱い、また議論の解釈や評価に焦点を当てるなどの転回が見られる。さらに、その取り扱う領域についても、意思決定や情報ソースの批判的な扱い方などにまで拡大されている。

現在、論理学とクリティカル・シンキングは異なる目的をもつ異なる科目として認知されているが、当初は論理学の一分岐である「非形式論理学」において新しいアプローチとしてクリティカル・シンキングが混入していた状態であったことがわかる。しかし、本来理論的な研究領域である非形式論理学に対して、クリティカル・シンキングは「教育」という側面に重点があり、従って現代の教科書では「非形式論理学」ではなく「クリティカル・シンキング」の名を冠する方が多数派となっている。といっても、もちろん非形式論理学が教科書の領域から消滅したわけではなく、クリティカル・シンキングの重要な一要素として存続しているのである。

非形式論理学の現在と将来

Johnson らは総括として、非形式論理学は近年独自の学問領域として発展し、若々しい時期にあるが、理論的にはまだまだ不十分であると指摘していた。そして、この研究領域の発展のために、先行研究の理解を進めること、その本性や要素そしてそのカバーする範囲などを明確にすること、取り組むべき諸問題のリストをつくること、雑誌を発行し理論と実践のギャップを埋める必要性を認識すること、を提案した。

Johnson らのサーベイの後すでに20年以上が経ち、現在、非形式論理学は独立的な研究領域としてというよりもむしろ、クリティカル・シンキングにおける重要な研究領域として発展を続けているように見える。非形式論理学の扱う問題は、クリティカル・シンキングにおける一般的な原則や方法を導く上で、何らかの解決が要求される問題である。従って今後も、クリティカル・シンキングは非形式論理学に研究課題を供給し、また非形式論理学はその研究成果をクリティカル・シンキングに与え、両者は一体となって発展しつづけていくであろう。

¹⁴ A.C. Michalos, *Improving Your Reasoning*, Prentice-Hall, 1970 (『虚偽論入門』須原一秀訳、昭和堂、1983)』